国際社会文化研究所紀要　第８号（2006年）

研究ノート

からほり長屋再生プロジェクト
―― 地域イメージ形成によるまちづくり ――

寿崎かすみ*

Nagaya remaking project in Karahori-area with using a method of making image or the area

Kasumi Susaki*

In this paper, Nagaya remaking project in Karahori-area is analyzed as a project of making an image of the area. To do this analysis, several field works have been done.

And to make the problem in Karahori clear, a comparison with Nada in Kobe, Oxford and Lacock in England have been done.

１．はじめに

本稿では，からほり地区のアートイベントに象徴される長屋再生プロジェクトを，「地域イメージの形成」によるまちづくりのひとつのケースとしてとらえ，他地域のケースと比較して特徴および問題点を明らかにする。他地域としては，震災復興の中でイメージをまもり続けることを選んだ灘の酒蔵エリアと，イギリスのオックスフォードおよびレイコックをとりあげる。

２．からほり地区のイメージ形成

2.1　からほり倶楽部の活動

からほり地区には［１］，大通り沿いの高層マンションの壁に囲まれたエリアに，昔ながらの長屋が少数ながら残っている。長屋の一部は改修され住居として，あるいはショップとして利用されているが，空家となっているところも多い。この地域で「からほり倶楽部」と名づけたグループが長屋の再生活動をはじめ，地域住民に地元を見直してもらう企画として年に１度，アートイベントを開催している。このことが新聞，雑誌等にもとりあげられている。

このような活動の成果としてからほり倶楽部は大阪市コミュニティビジネス事業の補助金を獲得し，またからほり地区はHOPEゾーンの指定を受けるにいたった。

空堀地区のHOPEゾーン事業については，大阪市のホームページでも紹介されている。

＊ 龍谷大学国際文化学部

空堀地区 HOPE ゾーン事業

空堀地区HOPEゾーン事業

空堀地区は都心でありながら戦災を免れたことにより，今なお，戦前のたたずまいを残しており，数多くの長屋や町家，坂道や石段，石畳の路地などが表情豊かなまちなみを形成しています。また，地区の中心を東西に商店街が通っており，商店主によってイベントが開催されるなど，昔ながらの賑わいや界隈性をも有しています。さらに，最近では，長屋や町家が住宅をはじめとし，店舗などに再生されるケースもあり，若い人を中心にまちなみの魅力に惹かれた人々が集まってくるなど，これらのまちの資源を保存再生しようとする新たなまちづくりの機運が高まってきています。

今後「空堀地区」においても，地域住民と協力し，長屋や町家などの修復及び活用の促進，坂道，石段，石畳など地域の景観資源の修景整備を行なう HOPE ゾーン事業を実施し，都心部における魅力的な居住地の形成を図っていきます。

平成16年度は，「空堀地区 HOPE ゾーン協議会」（H16年８月設立）を中心とした地域の住民の方々と協力して「まちなみガイドライン」を作成する予定です。

問合わせ：大阪市住宅局　住環境計画課　TEL：06-6208-9622
FAX：06-6202-7064

〈事業区域〉

中央区上本町西１～３丁目
瓦屋町１丁目１～９番
谷町６，７丁目
松屋町３，４番

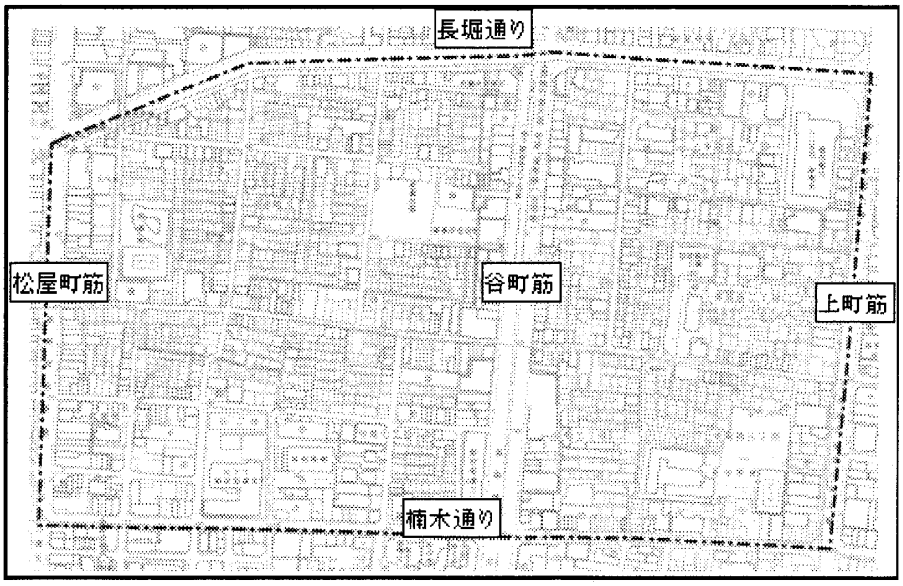


図１　HOPE ゾーンからほり
大阪市ホームページより［２］

2.2　からほりの居住者の反応

からほりクラブの活動に関し，また長屋を再生すること，今後のからほりの姿がどうあってほしいかについて，地元住民へのアンケート調査を2004年８月に実施した。この結果の一部は［１］［３］にて発表しているが，からほりが雑誌等にとりあげられたことは地元住民にも知られており，新しい人，新しい住人が増えたという印象を受けていることが明らかになっている。その一方で，

からほりの将来像としては，今のままの下町情緒を残したまちなみを維持することを望んでいるという結果もでている。

2.3　長屋を再生することについて

下町情緒を残したまちなみを維持するには，下町情緒をかもしだす物理的な要因である「長屋」が使われ続けることが必須であると考える。長屋に住むこと，現代の生活に合うよう改修すること等についての前述の2004年８月に実施した地元住民へのアンケート調査の結果を以下に示す。この調査では，からほり地区の住居1000戸のポストに調査票を投函し，郵送により回収した。回収率は24.7%である。回答者の属性は，男性35%，女性65%である。回答者の年代は50代以上が過半数を占め（図２），居住年数31年以上が48%（図４），長屋の居住者は23%（図５）である。

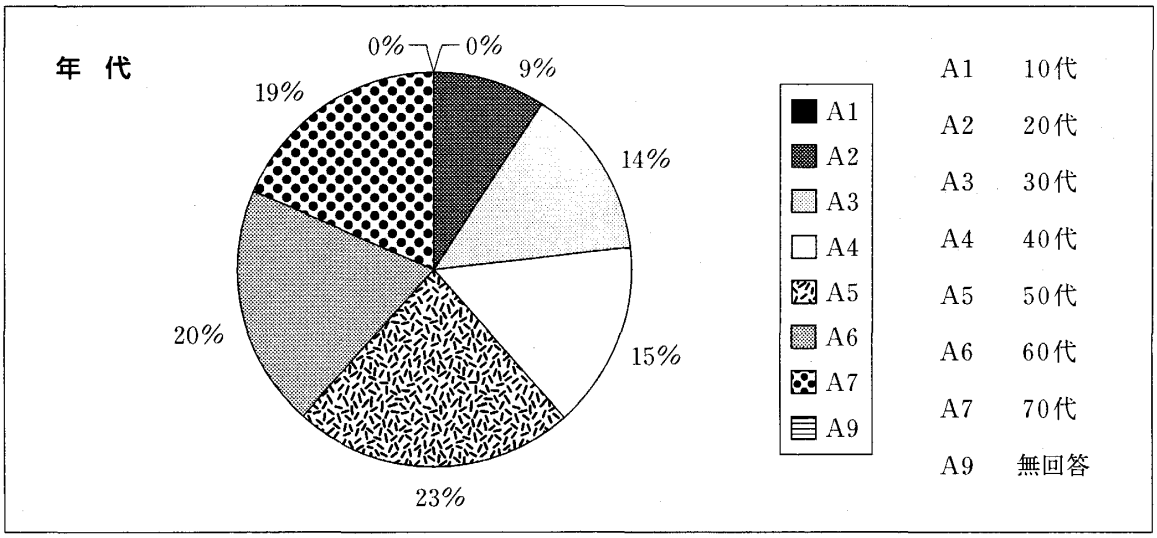


図２　回答者の年齢

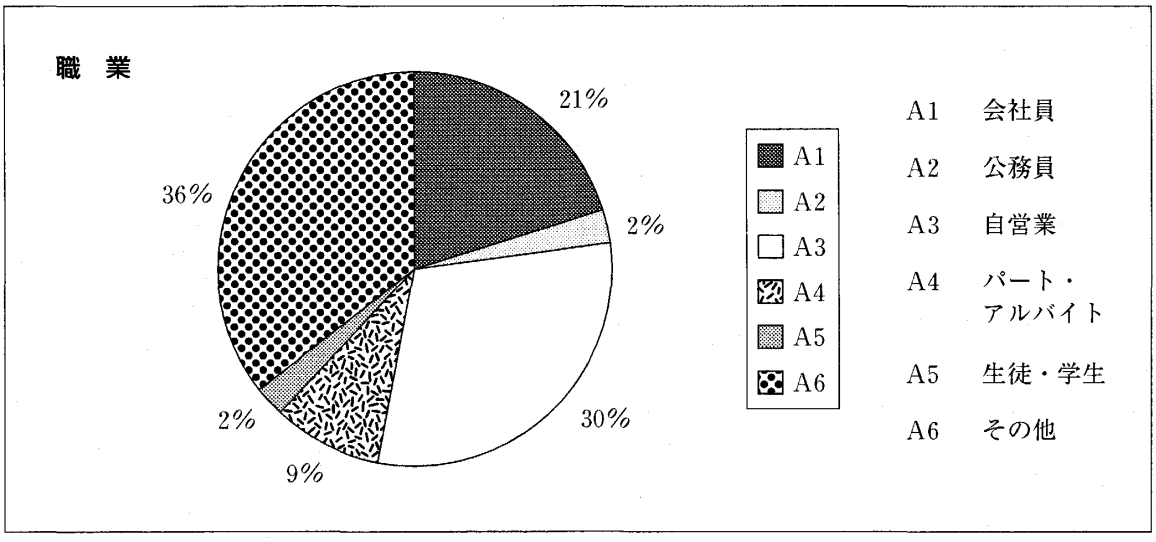


図３　回答者の職業

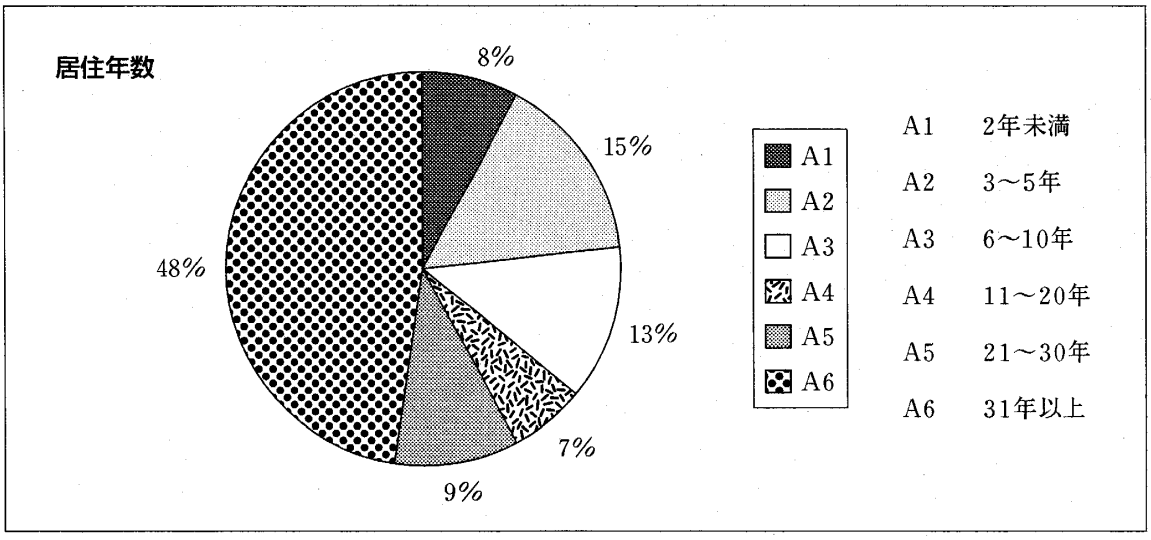


図4　回答者の居住年数

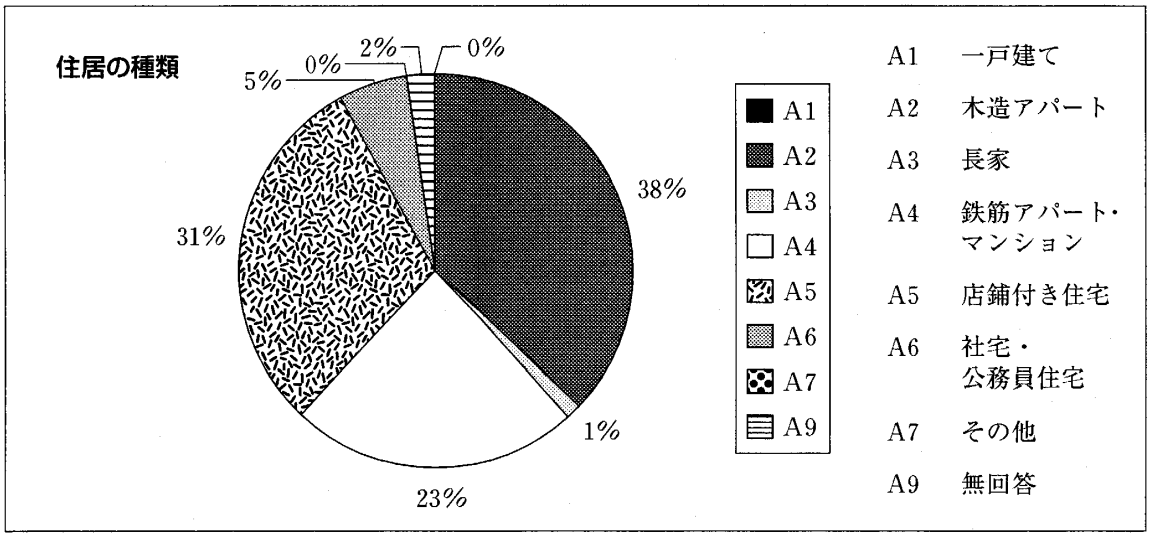


図5　住居の形態

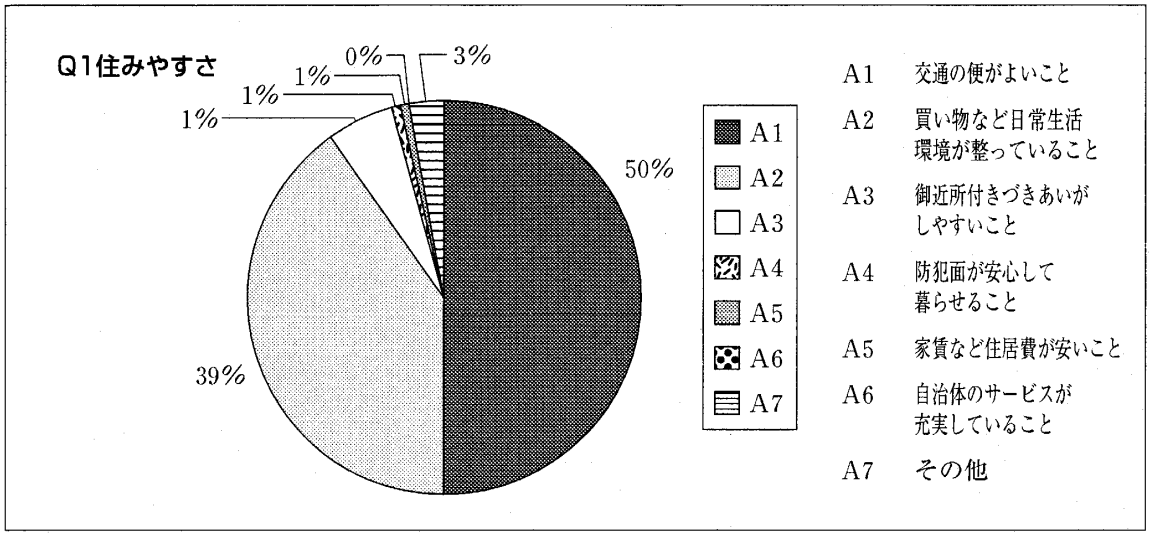


図6　からほりの住みやすさを実現している要因

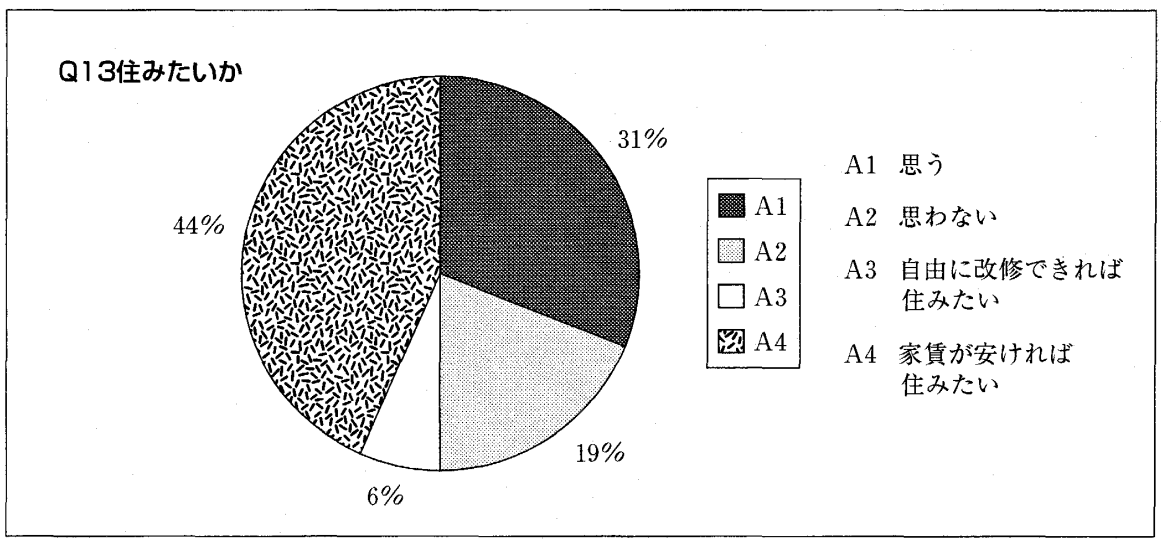


図7　からほりへの定住意識

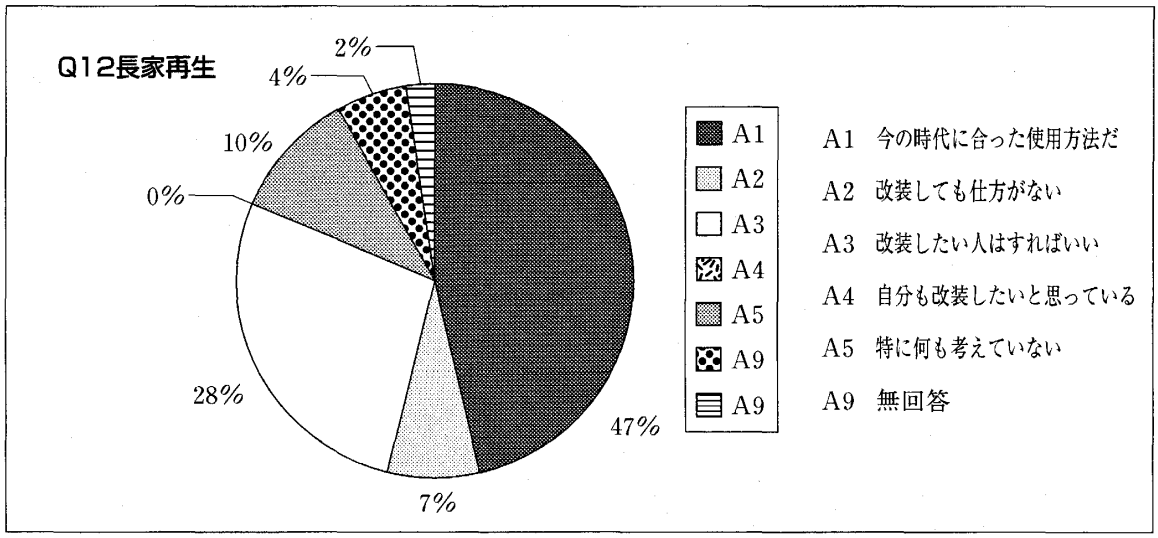


図8　長屋を再生することについて

図6に示した結果から，からほりの住みやすさは「交通が便利であること」，「日常生活に必要な施設が整っていること」によっていることがわかる。また，定住意識も高い（図7）。ただし，この点に関しては，回答者の平均年齢が高いこと等を考慮する必要があると考えられる。また，図8に見られるように長屋を再生することについても，賛成意見が多数をしめることがわかる。

長屋に住むことについても積極的な回答が多数みられる（図9）。

3．灘の酒造地域

灘五郷は神戸市東部から西宮市西部にかけての臨海部に位置する全国有数の清酒生産地域で，西郷（神戸市灘区），御影郷，魚崎郷（以上，神戸市東灘区），西宮郷，今津郷（以上，西宮市）をさす。灘の酒造業は18世紀前半以来の歴史と伝統をもち，幕末には江戸に荷揚げされた酒の6割が灘酒だったといわれる。現在でも兵庫県の清酒課税出荷数量は都道府県別で第一位，約30%の全国シェアを維持しており，その2/3は灘で生産されている。灘の酒は全国ブランドとなったため，本

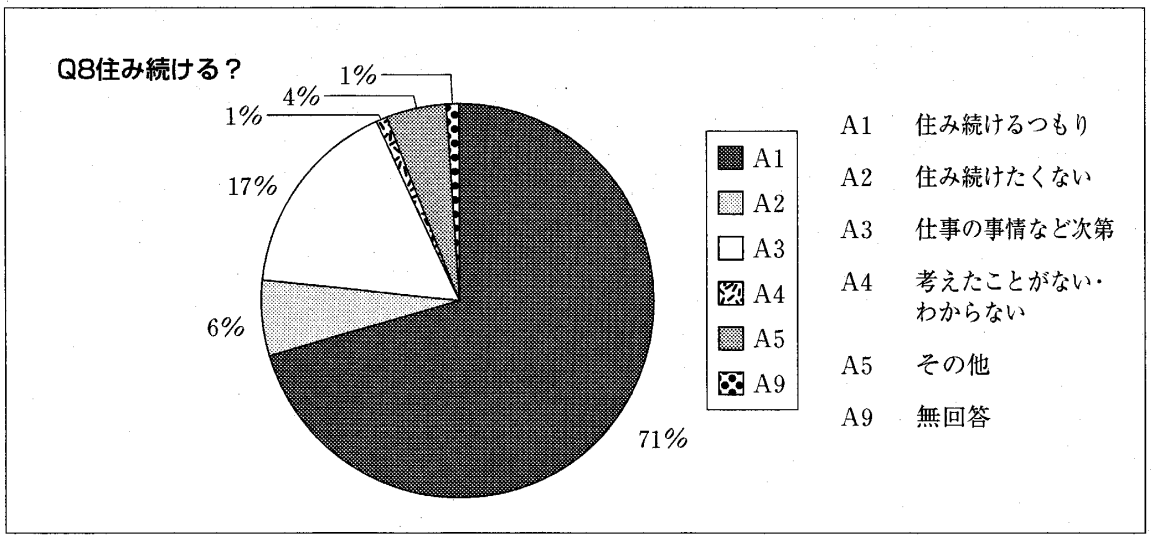


図９　長屋に住むことに対する意識

社機能を灘に移転して，灘の酒のブランドを手に入れるということも行われた。

しかし，全国的にみて日本酒の生産量は1975年頃をピークに減少に転じており，灘五郷も例外ではない。それでも1995年の阪神・淡路大震災までは横ばい，もしくは単年度では微増であったが，震災を機に減少を続けている。全国的な日本酒生産量減少の原因として，消費者の日本酒離れが言われているが，灘五郷のではこれに加えて，製造施設の破壊等，震災による大きな影響があることが指摘されている［４］。

さらに，インターネット販売等々の広がりは酒類の販売にも「地酒ブーム」として影響を与えており，灘という全国ブランドが必ずしも売り上げを伸ばすことに結びつかなくなっている状況もあることが指摘されている。

酒造企業が撤退すると，大規模敷地が残され，なんらかのかたちで転用されることになる。灘五郷での現状を見ると，転用用途として集合住宅とスーパーマーケットやホームセンター，あるいは酒造記念館などの観光施設が多い。酒造記念館をめぐる観光コースも設定され，図10に示すマップ

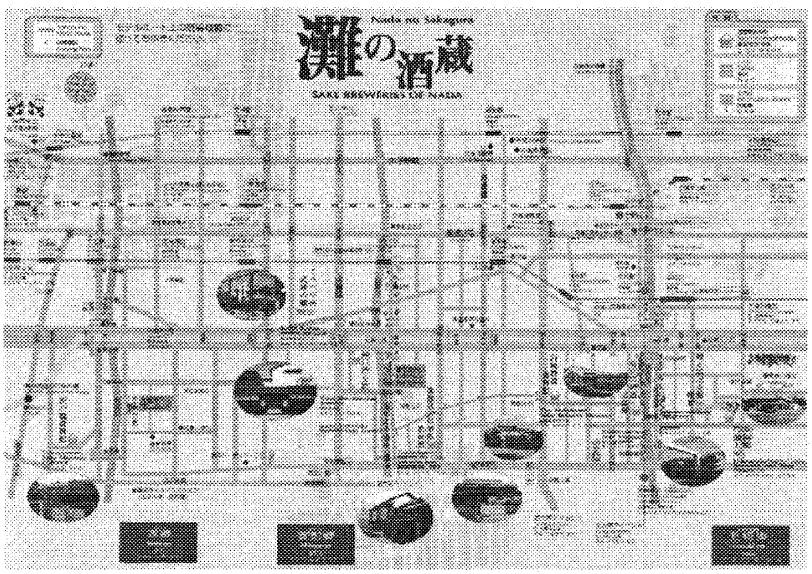


図10　灘の酒造マップ［５］

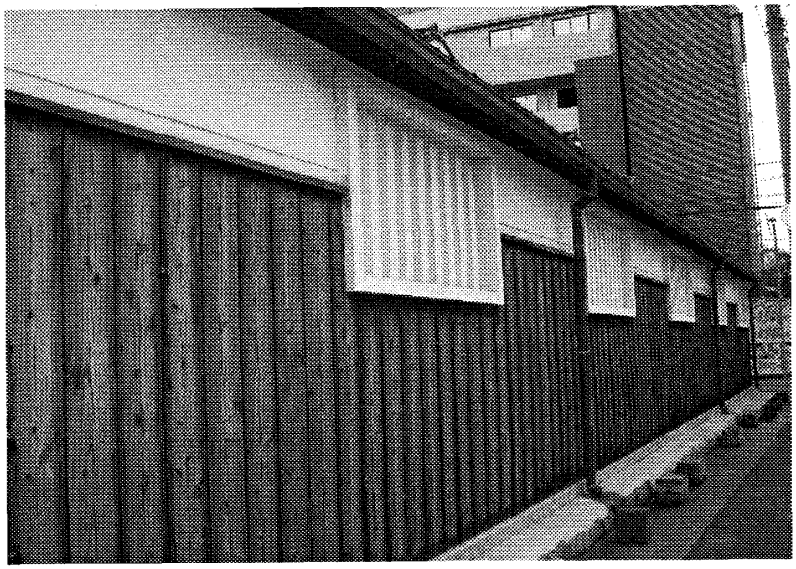


図11　魚崎郷の景観に配慮した塀

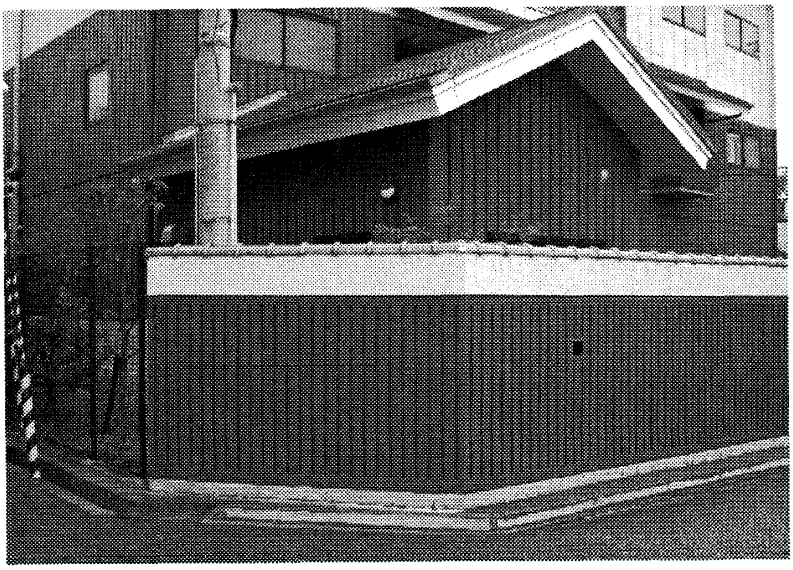


図12　魚崎郷の景観に配慮した建物

を神戸市観光課が製作・配布している。地元の私鉄も酒造めぐりをPRするなどの動きがみられる[6]。

酒造跡地が集合住宅等に転用される場合，江戸期以来のまちなみが大きく変化することになる。また，酒造と，集合住宅に入居した住民の間での摩擦もおきている。このような中で，魚崎郷では，地元の取り組みで景観形成市民協定が結ばれ，町並みの復興に向けた努力がなされている。

協定では「まちなみ形成のルール」として屋根，壁面，兵，広告物，色彩，材料，荷さばき場，駐車場の出入口，自動販売機などの各項目について定めており，壁面について和風の意匠を原則とすること，景観道路に面して塀を設けること，広告物はまちなみを阻害しない意匠・設置方法とすること，自動販売機は，景観道路に面して設置しないこと，駐車場の出入口を景観道路に面しては設けないことなどが定められている。

このような協定に従って立て替えられたまちなみが図11，12である。



図13　協定区域を示すモニュメント



図14　協定区域に建てられたマンションに付属した公園

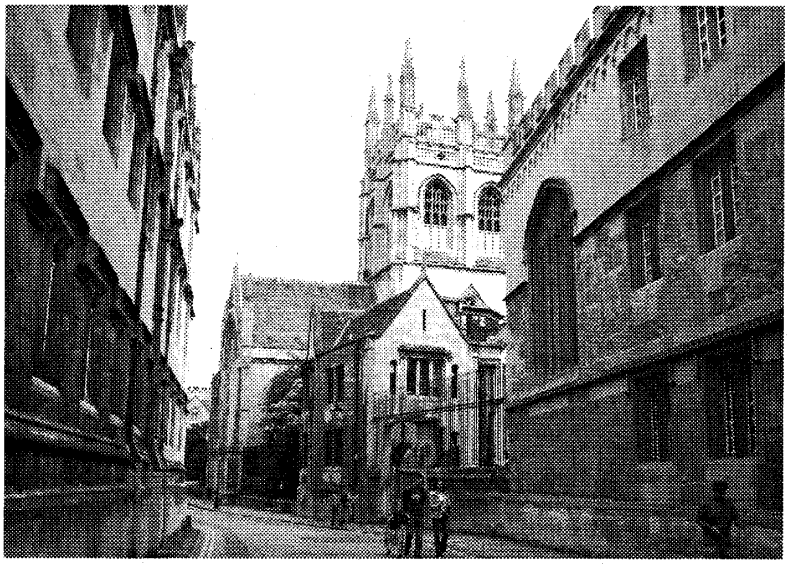
4．海外の事例

4.1　オックスフォード

イギリスの都市，オックスフォードはロンドンから電車で１時間程度のところにある小さなまちであるが，オックスフォード大学が存在することで世界的に有名である［7］。厳密にいうと，カレッジと称される個々の学寮が，学生，研究員の教育を目的としてまとめられた機関がオックスフォード大学であり，オックスフォード大学と呼ばれる建物はない。このエリアに見られる建物のほとんどはカレッジに所属する。中世以来のカレッジの建物と，各カレッジの歴史の中でつくられた伝統，風習，儀式等々がまちの雰囲気をつくりあげ，まちのイメージをつくりあげている。

学寮をもつカレッジは13世紀頃，大学で学ぶ学生の宿泊施設をめぐる地元住民との摩擦を解消するためにはじまり，国王から教会と同様に基本財産としての土地を与えられ，資産管理，自治能力がカレッジにもたらされたところからはじまる。

カレッジは，映画の撮影等にも使用されている。また，ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」の舞台であることなどもあり，オックスフォードは観光都市としてガイドブックにも掲載され


図15　中世から続くまちなみ

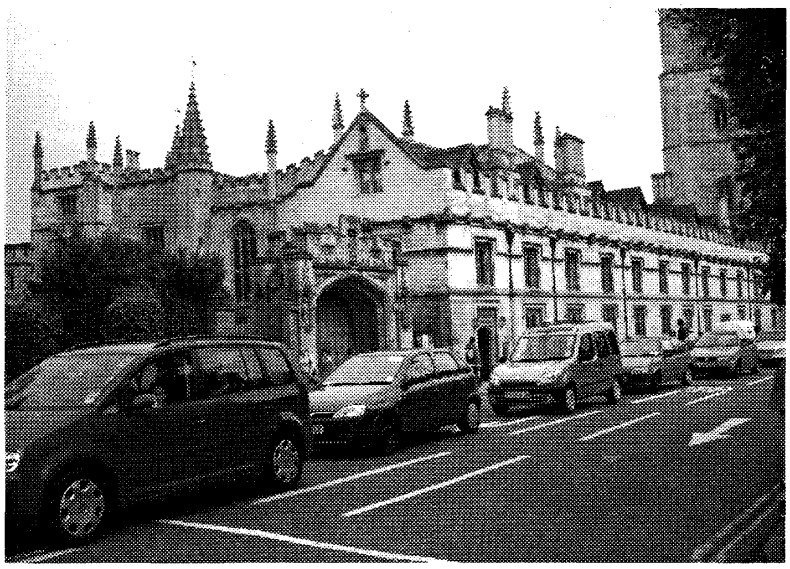


図16　中世からのカレッジの建物と自動車の列



図17　オックスフォードの公立図書館

ている［８］。一部のカレッジは有料で観光客に建物の一部を公開している。有料のガイドツアーに参加すると見学が可能なカレッジもある。大学所有の博物館，植物園などのほか，小川を船で下るパント，観光客のための博物館等もあり，観光ポイントとなっている。

市内には，各カレッジの紋章のはいったネクタイ，タイピン，トレーナー等々にはじまり，オックスフォード大学の名前いりのグッズを売るショップがならび，観光客でにぎわっているほか，マーケットや近代的なショッピングセンターもあり，まちとしての賑わいを見せている。

4.2　レイコック

レイコックはロンドンから電車とバスで１時間のところにある小さなまちである。コッツウォルズと呼ばれる地域の南端に位置する。写真のネガのしくみを発見したフォックス・タルボット氏の子孫がまち全体をナショナル・トラストに寄付したため，まちの中にあるパブ兼Ｂ＆Ｂをはじめとし，すべてがナショナル・トラストの管理下にあり，昔ながらのまちなみを護るためのさまざまな



図18　オックスフォードのショッピングセンター

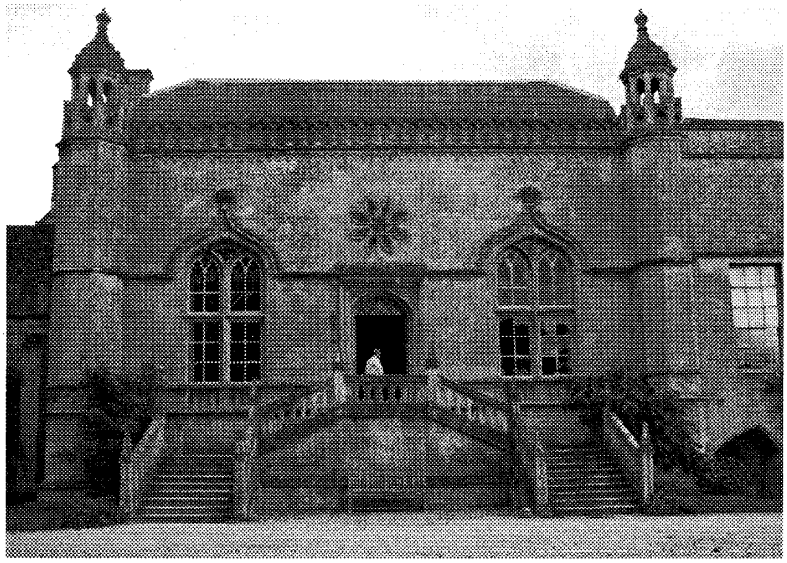


図19　レイコック・アビー　正面玄関

規制がなされている［9］［10］［11］。

まちの中心は1232年に建築された修道院，レイコック・アビーである。ハリー・ポッターをはじめ，数々の映画のロケーションに利用されているが，第二次世界大戦中はロンドン市内の小学校からの小学生を疎開児童として受け入れた歴史を持つ。

レイコック・アビーには広い芝生の庭が付属しており，この芝生を利用した催しものが行われている。ナショナル・トラストの管理のもと，駐車場，車椅子用のトイレなどが整備されている。まちの中のパブも昼間は子どもと犬もウェルカムとして営業している。家々には現在も人が生活している。

5．地域イメージをいかにして育てるか

灘五郷には，江戸時代からの歴史に裏打ちされた「酒造のまち」というイメージがあり，震災からの復興の過程でそれをよりどころとして住民がまちを見直す動きがはじまった。しかし，酒造自

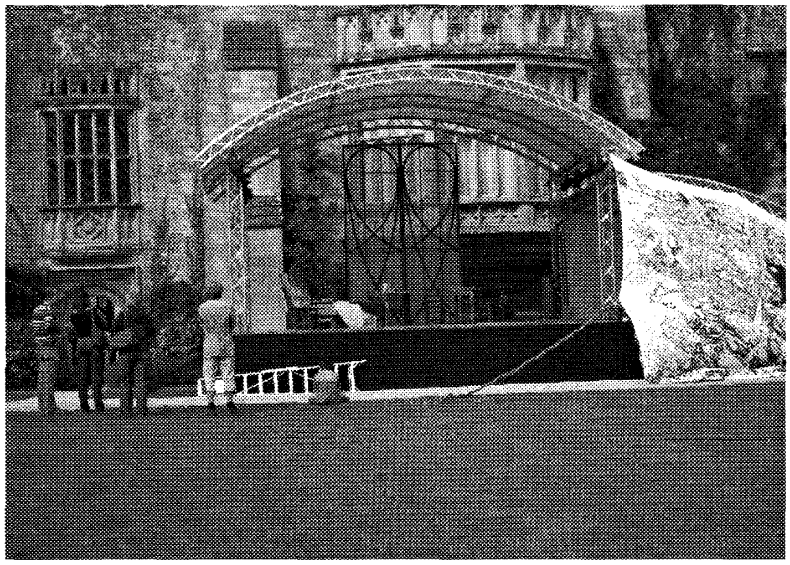


図20　レイコック・アビーの芝生を利用したイベント（準備風景）



図21　レイコックの教会堂に集まる人

体は減少しており，酒造りの方法の変化に伴って酒造の建物も変化しているという現実があるため，おのずと限界がある。

イギリスのオックスフォードの場合，世界的にも名高いオックスフォード大学が存在することで，「大学のまち」としてのイメージ形成されており，さらに，中世以来の建築物がカレッジとして今も利用され，大学の諸行事として中世以来の行事が行われているということがそのイメージを強化している。また，それぞれのカレッジは土地建物を所有しているということから，中世以来の建築物を持つことがカレッジの評価および運営に不利益に働かない限り，まちなみも保存されると考えられる。

レイコックは，まち全体がナショナル・トラストに所有され，管理されているという意味で，まちなみが変わること等はありえず，イメージが変わることも考えられない。

以上のことより，空堀地区が確固たる地域イメージを形成するうえでの課題として次のことがあげられる。



図22　レイコックのまちなみ

一つめは，イメージを形成に用いようとしている「長屋」の数が必ずしも多くなく，歯抜け状態であること，二つめはイメージを形成することがその所有者の利益となるかどうかが活動の中で議論されていないことである。

確固たるイメージの形成には，すでに失われた長屋そのものを再建するというところから活動することが必要であり，再建することがなんらかの意味で所有者の利益となることを示すことは，保存活動をしている人々の課題であると考える。

参考文献

[1] 寿崎かすみ，柴田和子「大阪・京都の長屋・町屋再生によるまちづくり活動」都市住宅学　第47号　2004年
[2] 大阪市HP　http://www.city.osaka.jp/dwelling/town/hope.html　2005年9月
[3] Kasumi Susaki 'Planning for political minority' PROSCO 2005
[4] 山本俊貞「魚崎郷」2004年10月
[5] 神戸市生活文化観光局　観光交流課「灘の酒造」2006年6月
[6] 阪神電気鉄道（株）広報室「阪神電車　2005年2月号」
[7] ジャロルド・ガイド　大学の街「オックスフォード」Jarrold Publishing　1992年
[8]「地球の歩き方」編集室「地球の歩き方　イギリス　'04～'05」ダイヤモンド社　2004年
[9] 丸茂和博　他編　新ロンドンから行く田舎町　双葉社　2005年9月20日
[10] THE NATIONAL TRUST 'HANDBOOK FOR MEMBERS AND VISTORS 2005
[11] THE NATIONAL TRUST 'LACOCK' THE NATIONAL TRUST 1981

その他の参考文献

Christopher K.Young 'LIFE AT OXFORD' Wolfbane Publications 1996
Peter Snow 'OXFORD OBSERVED Town and Gown' Cambridge University Press 1991
Jan Morris 'The Oxford Book of Oxford' OXFORD UNIVERSITY PRESS 1978